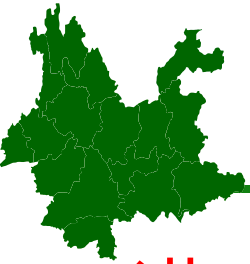




中国西南民族史

5.南詔国による雲南統一②

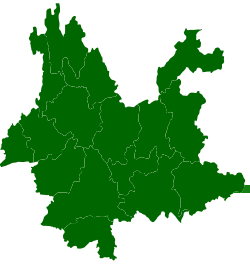


国内体制の整備

■ 漢人鄭回の起用 (史料5.11)

- もと相州(河南安陽)の人
- 天保年間に明経に合格, 舊州西瀘県令に南詔国が舊州を陥した際に捕虜に
- 閣羅鳳に儒学の知識を見いだされ鳳伽異・異牟尋・尋閣勸の**家庭教師**となる
- 異牟尋即位後は**清平官 (=宰相)**の筆頭を務める

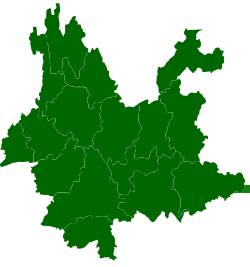
→ 支配階層の文化に大きな影響力
(このような漢人は他にもいた可能性?)



国内体制の整備

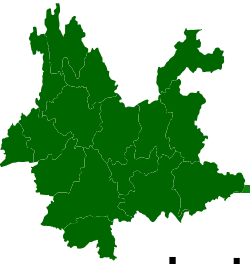
- 諸制度の整備（中央官制・地方統治体制）
 - 『南詔野史』碑陰に列挙された人物のさまざまな官職（史料5.12）
→この時期に創設されたもの

大暦14（774）**閣羅鳳死す**
鳳伽異早逝のため**異牟尋が継ぐ**



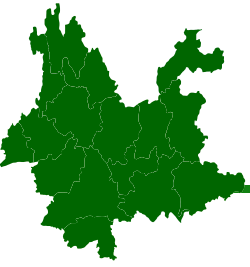
南詔政権の構成

- 王 族：蒙氏「自言本永昌沙壺之源也」
哀牢人？
父子連名制からみれば烏蛮系
- 重臣層：「西洱河蛮」
洱海南方の肥沃な盆地（鳳儀・祥雲・弥渡）の
農耕民，白蛮系
＝「白子国」の主要民族
特に楊氏・段氏・趙氏が「大姓」

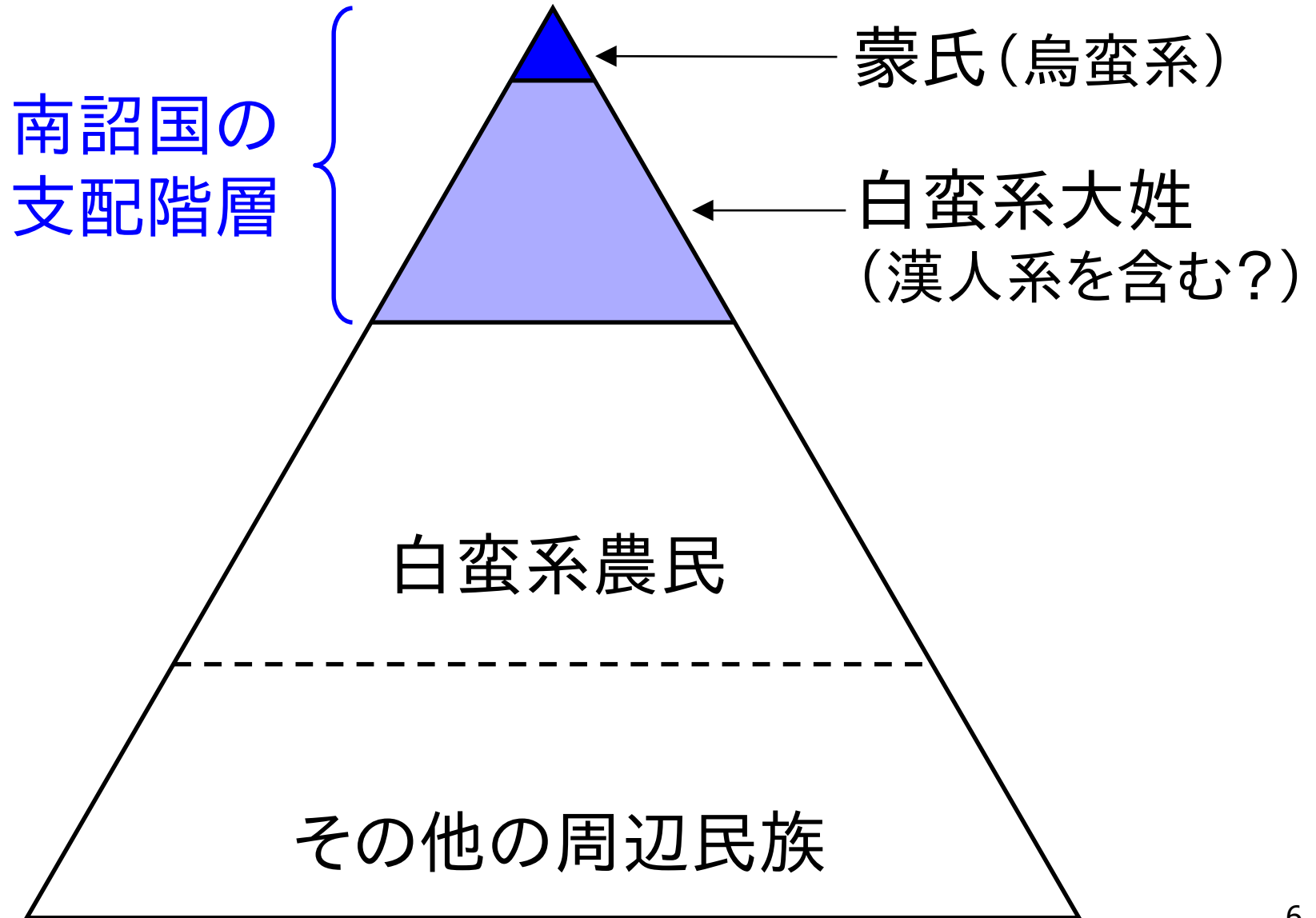


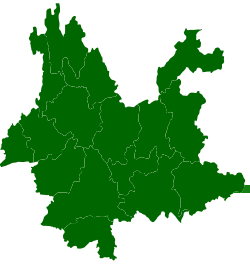
南詔政権の構成

- 唐初の(張氏)白子国
= 洱海南方の**白蛮系**有力氏族連合:
西洱河蛮・漢姓(唐代以前の移民?)中心
- 蒙氏は張氏王権を継承=文化的にも強い影響
- **数的には圧倒的に白蛮系が多い**
 - 『南詔徳化碑』(766)碑陰の官員名簿など
 - 藤澤義美による研究「南詔国の支配階層」



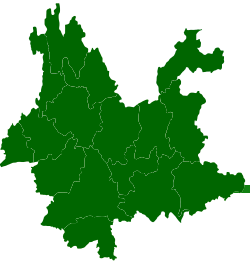
南詔国の「民族構成」





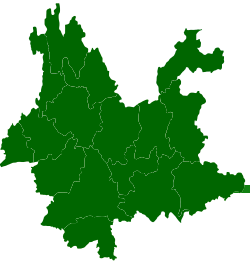
南詔国の官制・諸制度

- 吐蕃服属期(8世紀後半)に創設
- 『南詔徳化碑』(766)の碑陰の官職名
= 未整理な状態の官制を示す
- ↓
- 『蛮書』卷九「南蛮條教」(史料4.7)
= 一応の整理が終わった官制



南詔国の中央官制① 宰相級の高官

- **清平官** (6人) : 宰相に相当
「毎日南詔とともに境内の大事を参議す」
→うち一人が内算官
「凡そ文書有れば, 便ち南詔に代わって判押處置す」
- **大軍将** (12人) : 清平官と同列
半数は外任, 節度城に駐在 (後述)
「毎日南詔と見えて事を議す。出れば則ち要害の城鎮を領し, 節度を称す」



南詔国の中央官制② 実務官庁

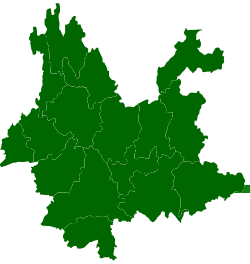
- **六曹長**: 兵曹、戸曹、客曹、刑曹、工曹、倉曹
「一に内州府六司掌るところの事のごとし」

- 他に

断事曹長: 「盗賊を推鞠 (=取り調べ) す」

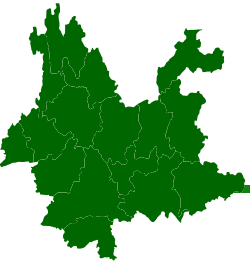
軍謀曹長: 「陰陽占候を主る」

など



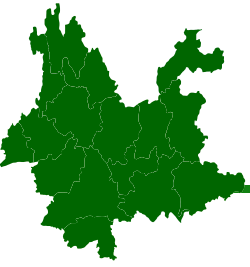
南詔国の中央官制② 実務官庁

- 六曹→のち**九爽三託**に改定(『新唐書』南蛮伝)
(史料4.8)
- 幕爽(主兵) 琮爽(主戸籍) 慈爽(主礼) 罰爽(主刑)
勸爽(主官人) 厥爽(主工作) 萬爽(主財用) 引爽(主客) 禾爽(主商賈)
「爽, 猶お省を言うなり」
- 督爽:「**総三省也**」
- 乞託(主馬) 禄託(主牛) 巨託(主倉廩)
「皆清平官・酋望・大軍將これを兼ねる」

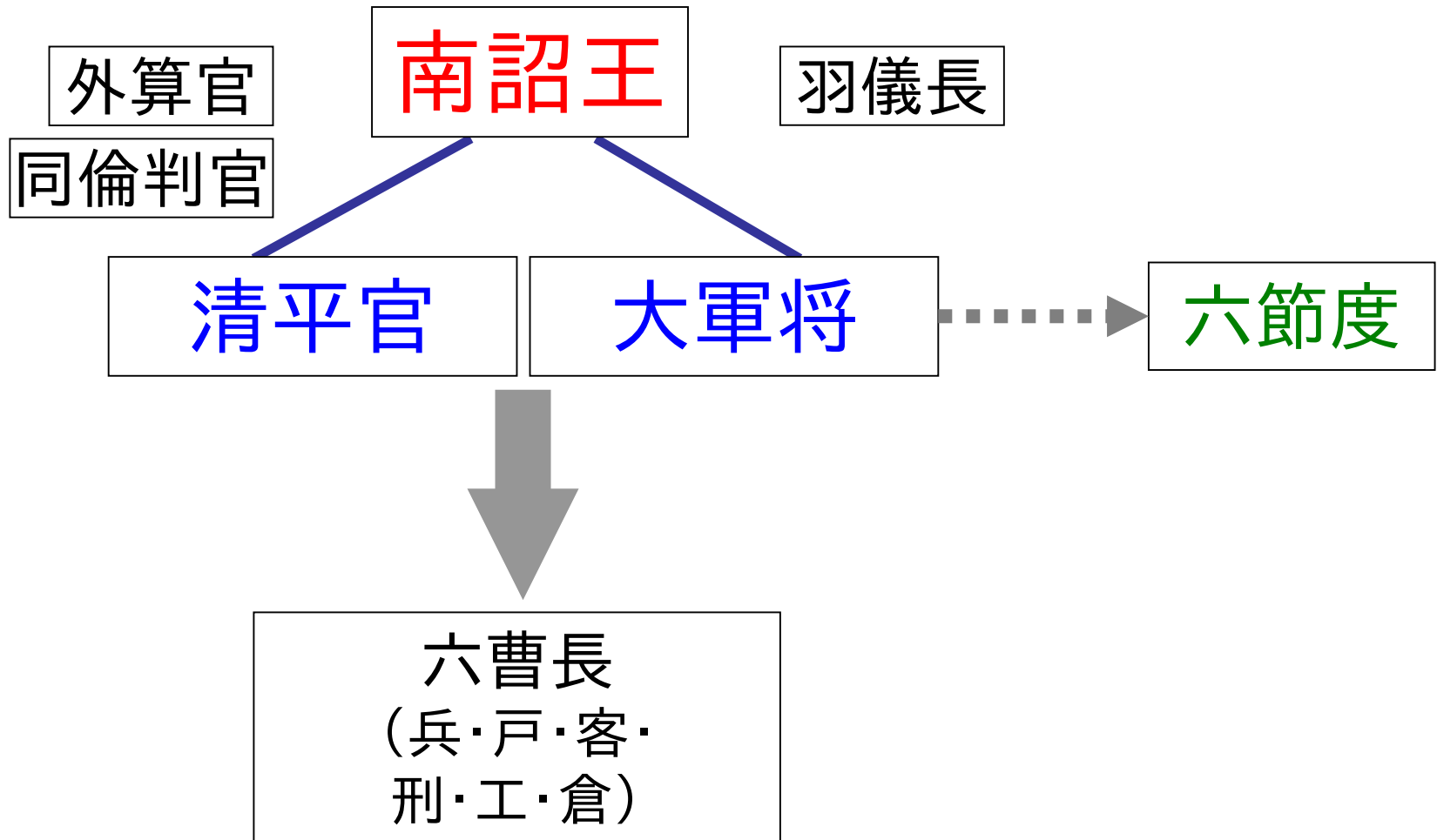


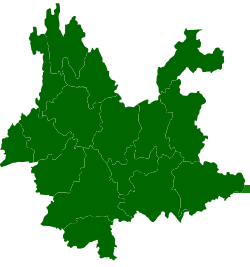
南詔国の中央官制③ 書記官・侍衛

- **外算官**：「記王所處分，以付六曹」（＝書記官）
- **同倫判官**：「南詔有所處分，輒疏記之」（〃）
- **羽儀長**（8人）：南詔王の親衛隊長
「清平官已下，每に入りて南詔に見るに，皆佩劍するを得ず。唯だ羽儀長のみ佩劍するを得」

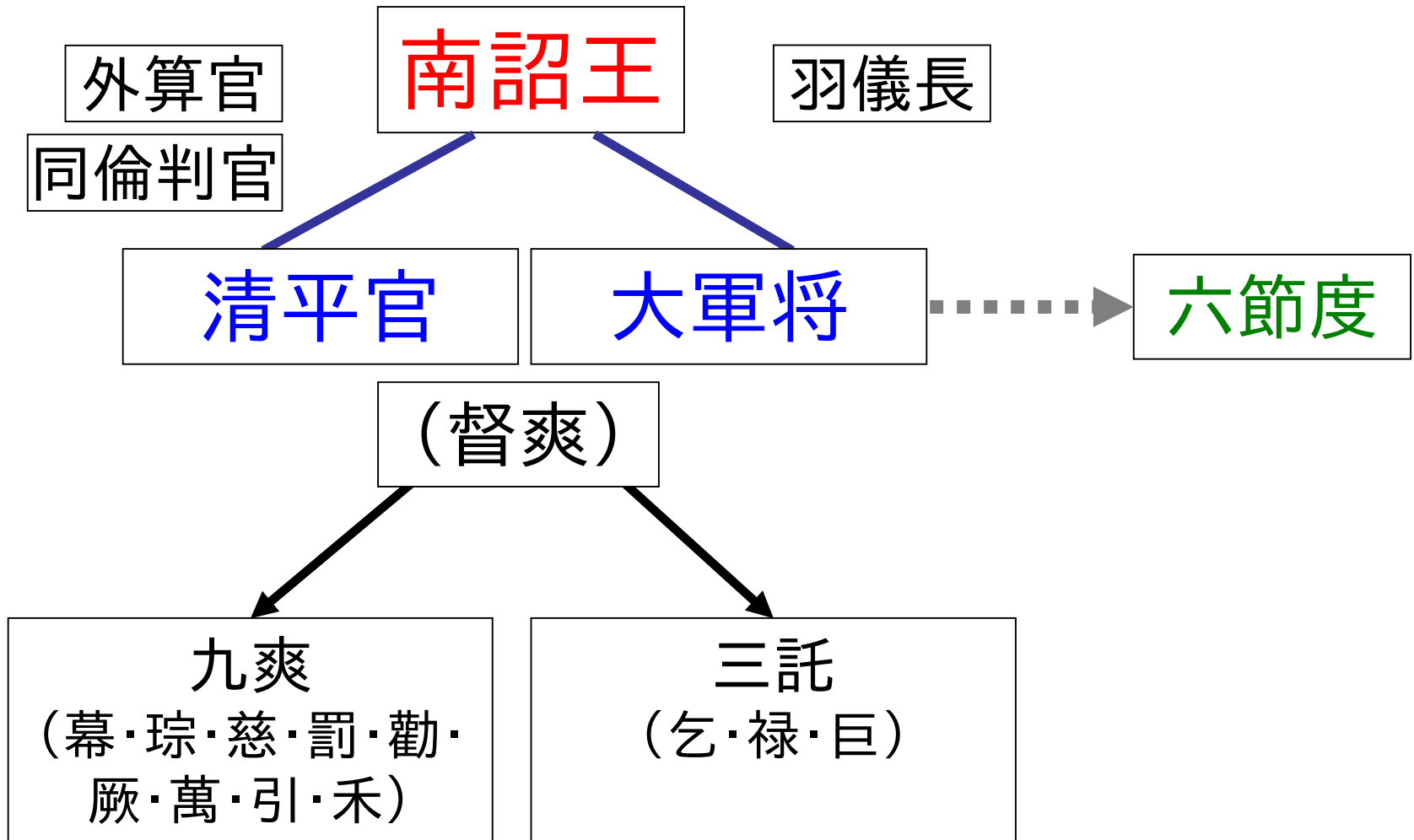


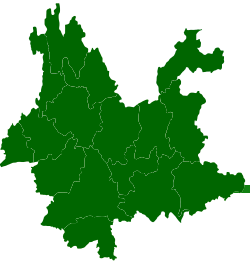
『蛮書』卷九の中央官制(六曹)





『新唐書』南蛮伝の中央官制(九爽三託)





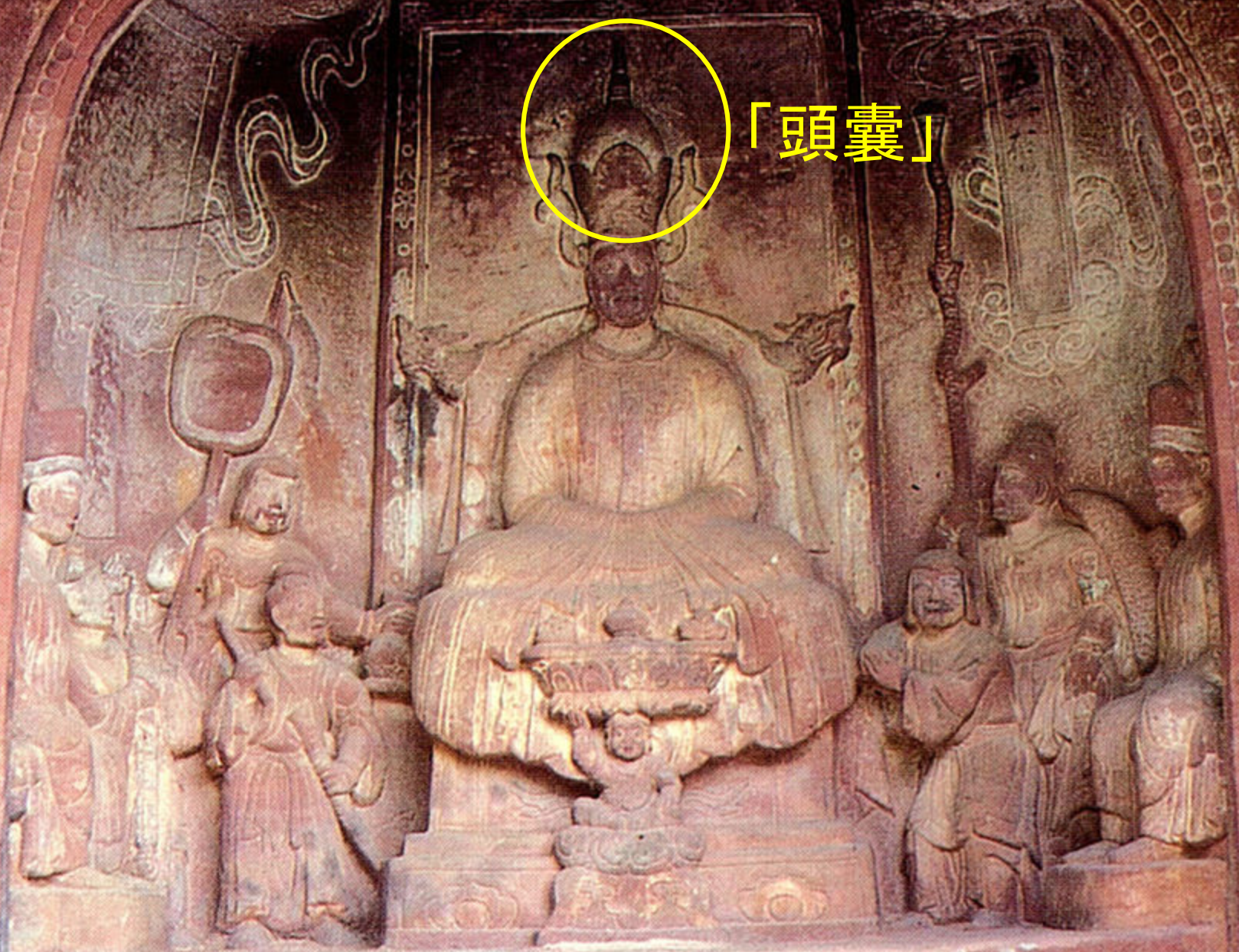
南詔国の中央官制③ まとめ

- 「唐の制度に習いつつ独自の特色」
隋唐帝国の周辺国家ではありがち(→渤海・日本)
- 吐蕃の影響もある
 - 衣冠(→石宝山石窟)
 - 「告身」の制度(→『南詔徳化碑』) とはいえ
- 具体的な制度はほとんど中国風
天宝年間に捕虜・逃亡兵などとして大理地区に移り住んだ漢人の影響(→清平官鄭回)

南詔王礼仏図(石宝山)(異牟尋?)



「頭囊」



剣湖（剣川郊外の湖）（乾期）



劍川石宝山(山門)(1994年)





范雲永隕

廣濟堂

范雲永隕

歷古名師聖德垂青

歷古名師聖德垂青



帝 道 常 昭

五皇大帝 敬 献

海源
張向榮
敬

祈天祈祥解運

畑の中の小さな祠に祭られていた「本主」



石宝山宝相寺



石鐘寺

石鐘山文保所 重立

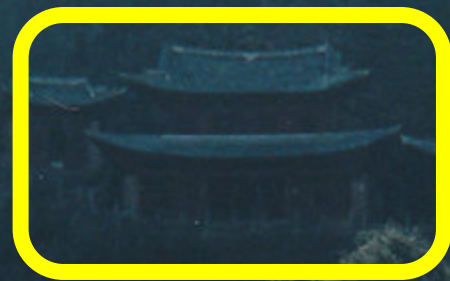
邑人孫士如書

公元一九八二年春

銅川縣石鐘山石窟文物保護管理所

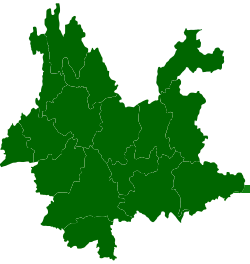
石寶山石鐘寺

12004



ここに閣羅鳳議政図
が収められている

1:20'94



地方行政制度① 中央

- 六賧(れん) : 畿内に置かれた「州」
 - 太和賧 = 太和城(739~763の都城)
 - 陽 賧 = 陽苴咩(ようしょび)城
(764に新建の都城, 今の大理城)
 - 史 賧 = 大釐城(今の喜洲, 「河蛮」の本拠地)
 - (澄) 賧 = 澄川城(旧澄川詔の中心地)
 - 蒙舎賧 = 蒙舎城(蒙氏発祥の地)
 - 勃弄賧 = 白崖城(旧白子国の中心地)

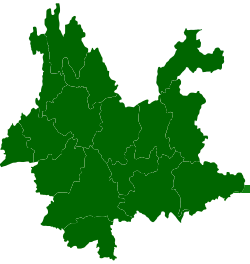


臉(れん, liàn)? 睽(たん, dǎn)?

- 方国瑜『中国西南歴史地理校釈』(P.443)
「……又按:臉字,樊志作臉,新唐傳作臉,而散見於各卷,則多作睽或睽。……按:南詔天啓十一年劍川石鐘山石窟題記有“三睽”地名,又中興二年畫卷題字有“獸睽”地名,則以睽為正。元史地理志及景泰雲南志諸書大都作睽,又作甸。今雲南各地,尚通用甸字為地名,當古昔相沿,蓋土語謂州若甸音,字作睽,亦作睽,後以形近誤為臉或臉,以至音讀不能相通,今以睽為正。下文所引,原作睽、作臉、作睽者,并改為睽,不作校語也。」
- これにもとづいて、『中国歴史地図集』もすべて「睽」に作っている

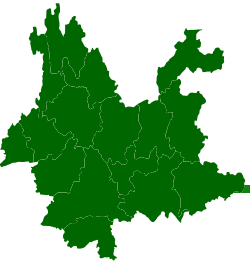
『中国历史地图集』(第五册, 80-81)





「燧」と「險」の使い分け

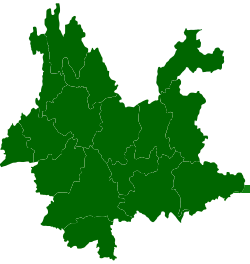
- しかし、『蛮書』（方国瑜のいう『樊志』）には險に作る地名と燧に作る地名が並存している
- 六險の中にも「燧險」があり、単なる通用字とは考えにくい
- 『蛮書』巻8の「南詔語」を列挙した中に、「川謂之燧」とある（「川」は河川ではなく山間の平地。「州」「洲」も同じ意味）



統治機構の名称は「賧」

- 「某賧」は盆地につけられた自然地名であり、南詔国の統治機構の名称ではない
- 南詔国統一以前の六詔の一つ「濛賧詔」が「濛川詔」とも書かれ、統一後にその地に「賧賧」（おそらくは「濛賧賧」の略称または脱字）が置かれていることからしても、統治機構の名称としては「賧」が正しい

（林 《有关南詔、大理国政区建置的几个问题》
《方国瑜诞辰一百一十周年纪念文集》）

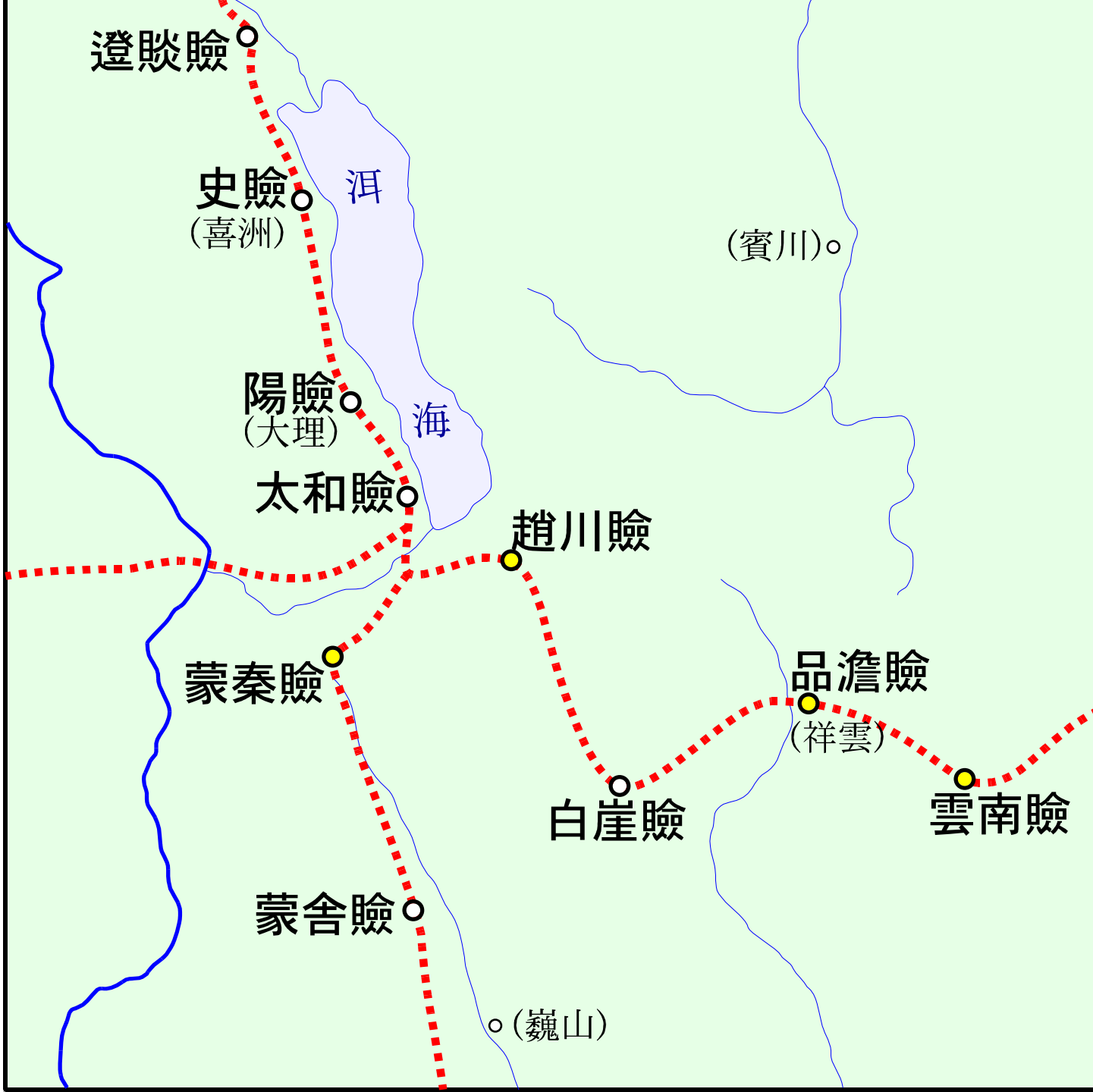


地方行政制度① 中央

- 六賧 → 『新唐書』南蛮伝では十賧に増加
 - 太和賧・苴咩賧(陽賧)・大輦賧(史賧)・澄川賧(睽賧)・白崖賧(勃弄賧)・蒙舍賧 は『蛮書』と同じ
 - 雲南賧 = 祥雲県雲南駅(もとの雲南節度)
 - 品澹賧 = 祥雲県
 - 蒙秦賧 = 旧蒙騫詔の中心地
 - 趙川賧 = 大理県鳳儀鎮

蒼山から洱海を望む①(1994年)



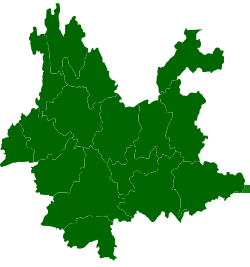


○ 『蛮書』の六監・

● 『新唐書』の十監 (増置分)

蒼山から洱海を望む②



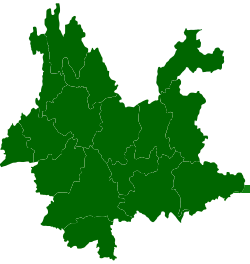


1990年の大理城南門



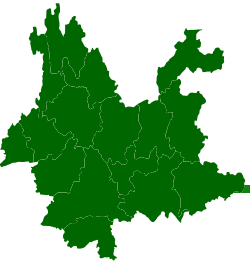
2009年の大理城南門





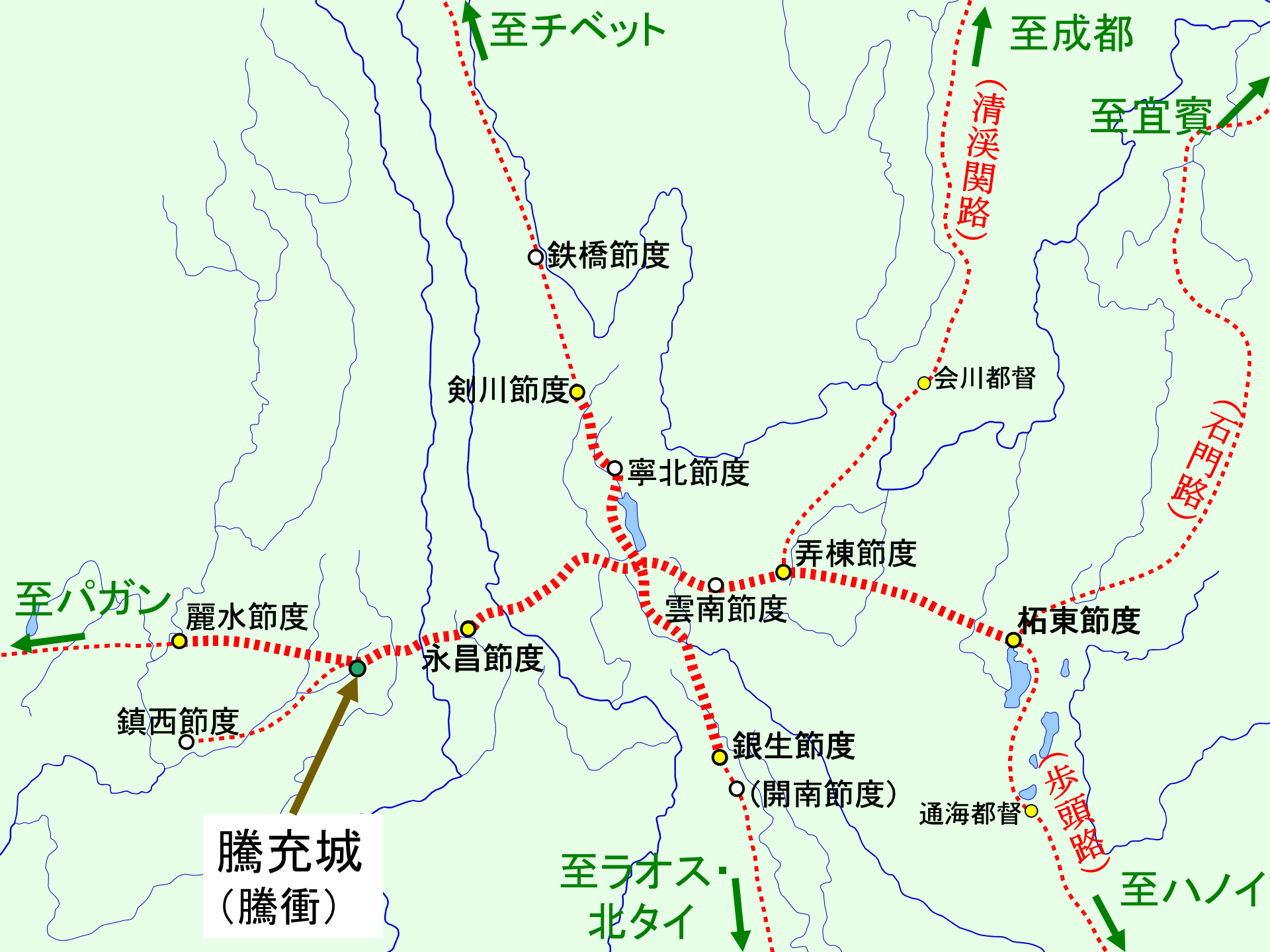
地方行政制度② 地方

- 六(七)節度:「**要害の城鎮**」交通の要衝
 - 雲南節度 = 雲南駅
 - 柘東節度 = 柘東城(今の昆明市)
 - 永昌節度 = 今の保山市
 - 寧北節度 = 今の鄧川鎮北部
 - 鎮西節度 = 今の盈江県
 - 開南節度 = 今の景東県南部(早くに陥没)
 - 銀生節度 = 今の景東県
 - 鉄橋節度 = 今の麗江県巨甸鎮(794年増設)



地方行政制度② 地方

- 『新唐書』南蛮伝：六節度・二都督
 - 永昌節度・銀生節度・柘東節度は『蛮書』と同じ
 - 弄棟節度 = もとの姚州の地
 - 劍川節度 = 今の劍川県
 - 麗水節度 = 今のミャンマー領内Talawgyi(イラワジ河岸)
 - 会川都督 = 今の四川省会理県(清溪関路上)
 - 通海都督 = 今の通海県(歩頭路上)



騰衝(雲南西部)郊外で発見された城壁址

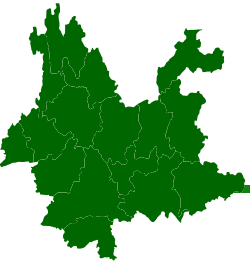


版築の跡が見える



版築の跡が見える





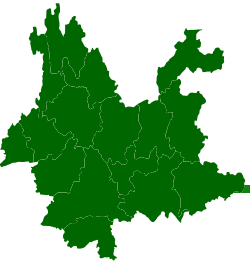
地方行政制度の特徴

- 軍事支配中心 (→「節度」「大軍将」)
- 主要交通路上の重要軍事拠点
(=各地の主要盆地)をおさえる



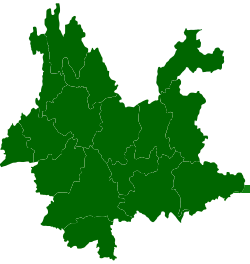
- 節度＝大軍将 (宰相級の高官)が赴任

→このような交通路で結ばれた盆地群
＝「南詔国」の実体 (「領域国家」ではない)



とはいうものの……

- 本当に大軍将は中央から「赴任」するのか？
には**疑問の余地あり**
- 地方の有力者が「大軍将」の肩書きで
中央政権に参加？(=在地勢力の連合体?)
↑
 - 『南詔徳化碑』の「某城大軍将」
 - 『新唐書』南蛮伝の「酋望」などもそれを匂わせる
- 『蛮書』のいう六曹長→大軍将→清平官 の
昇進コースのほうがタテマエ??

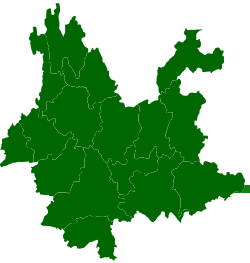


史料による制度の違い

- 『蛮書』と『新唐書』南蛮伝:

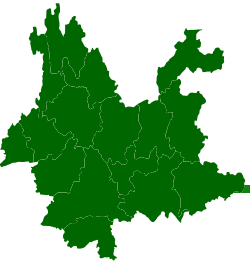
両書の述べる官制・諸制度の差異

→ 情報源(根拠史料)の違いにより,
反映する時期が違う



『蛮書』の情報源

- 主として794年に冊立南詔使として雲南入りした袁滋の『雲南記』による。
- 『蛮書』の記載(六曹・六賧・七節度etc)
=8世紀後半(吐蕃服属期)に制定された
当初の制度
- 「近年已來, 南蛮更添職名不少。」
樊綽は官制の改変を知っていたが情報がなかった



『新唐書』南蛮伝の情報源

- 『蛮書』そのものの他に、
徐雲虔『南詔録』（佚書）をも利用している。
徐雲虔は乾符年間の末（878～9）に雲南に使いした人で、『南詔録』はその見聞を記したものだ。
- 『新唐書』南蛮伝の『蛮書』と異なる部分
（九爽三託・十賧・六節度・二都督）
=9世紀中に改変された制度